



HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---------------------|---|
| Title | NIMBY問題における段階的合意形成過程の検討：決定プロセスの公正さに関する実証研究 [論文内容及び審査の要旨] |
| Author(s) | 横山, 実紀 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(人間科学) |
| Dissertation Number | 甲第15059号 |
| Issue Date | 2022-03-24 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/85423 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Miki_Yokoyama_review.pdf, 審査の要旨 |



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名： 横 山 実 紀

主査 教 授 大沼 進
審査委員 副査 教 授 結城 雅樹
副査 教 授 藏田 伸雄

学位論文題名

NIMBY 問題における段階的合意形成過程の検討：
決定プロセスの公正さに関する実証研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の特筆すべき成果として次の三点が挙げられる。

第一に、NIMBY 問題の合意形成という現実の問題に対し、短絡的な解決策を求めるのではなく、長期に渡る時間軸の中での決定枠組みに着目し、そのプロセス全体を手続き的公正という切り口から捉えるという視点をもたらした点にある。従来の合意形成研究は、単発的な市民参加とその評価、ステークホルダーの整理、ある一時点を切り取った公正さの評価といった断片的な研究に留まっていた。これに対して本論文は、そのような断片的な研究を切り取って単純につなぎ合わせるのではなく、合意形成過程全体を連続したものとして捉え、一つのパッケージとして統合し、実証研究として具体的なデータと共に示すことに成功している。

これと関連して第二に、社会心理学における手続き的公正研究に大きな前進をもたらした点にある。初期の手続き的公正研究は、法的・公的決定手続きの外にある決定プロセス全体に着目すべきとの関心に基づくものであった。しかし、こうした関心に実証的に応えることは容易ではなく、手続き的公正研究は次第に個別場面の評価の研究に限定されていき、その中での下位要素の些末な検討が中心となっていった。これに対して本論文は、そもそもの決め方をどう決めるかといった入口の議論から、当事者性が高まった個別具体的な状況へという一連の決定プロセスが、手続き的公正に適うことで社会的受容に繋がることをロバストに示すデータを提出している。

第三に、規範研究と実証研究の架橋に一定の成功を収めている点である。本論文は、既存の規範概念を実証研究の中で忠実に再現することは目的としていない。むしろ、その概念が現実の問題解決に使えるとしたら、果たしてどのように具現化可能かという順で考えていく。その中で、元々の概念の厳密な定義からは多少逸れることがあるとしても、抽象的な“べき論” (should) から、現実により得るエビデンスの提示 (be) への変換を試みた点は高く評価できる。例えば、無知のヴェールは、その提案者であるロールズの理論では「自分の生まれや性別、社会的立場などについて一切知らない」状況を想定するが、個別の研究の中で、「誰もが立地地域住民となり得る」かつ／または「自分の利害関係について知らない」状況と置き換えることで実証的に観測可能にすると共に、現実の問題解決場面に還元可能な考察を導くことに成功している。規範研究と実証研究の架橋は人文学・社会科学の一大重要ミッションであるが、掛け声ほどには進んでいない。例えば、“公正”について、倫理学などでは普遍的な公正とは何か、それをいかに定義するかという思考法によることが多いのに対し、行動科学をはじめとする実証研究の視点からは、人々が何を公正と感じるか、どのような状況や立場の違いが公正の捉え方の相違をもたらすかがリサーチクエスションとなる。本研究は、こうした“公正”への接近の違いを超えた議論の喚起により、人文学・社会科学の発展への寄与が期待できる。

付言すると、本論文は、科学技術コミュニケーションとリスクコミュニケーション、社会科学系由来のミニ・パブリックスのような市民参加と社会工学や都市計画で進展してきた工学系実践研究由来の市民参加など、様々な領域を結ぶ上でも示唆に富む知見がちりばめられている。本論文の成

果はこのような学際研究の発展にも資するものである。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は、上記のような学術的および社会的な価値を高く評価する。加えて、個々の研究が抱える限界についても自ら一つずつ指摘し、将来の課題を論じている点も評価できる。

一方、いくつかの課題も指摘することができる。第一に、“無知のヴェール”の操作的定義に個別の研究間で揺らぎがあり、理解しづらい点がある。最後の総合考察で再定義され整理されているものの、そこに至るまでが読者に不親切である。第二に、“一般市民”の扱い方がやや楽観的であり、本論文では公益的観点から偏りなく議論できる存在であるという強い仮定がおかれている点である。無作為抽出で参加者を選ぶミニ・パブリックスのような市民パネルでも、規範的にはそのように振る舞うはずでも、現実には必ずしもそうはいかないという問題への踏み込みが甘い。しかし、口頭試問において丁寧な補足説明がなされ、申請者はこれらの課題に十分自覚的であることが確認できた。課題に真摯に向き合おうとする姿勢から、今後さらなる研究の積み重ねが期待できる。

なお、本論文は査読付学術論文5本(うち英語1本)をまとめたものであり、申請者は学会賞の受賞が3件、学振特別研究員以外の競争的資金2件を獲得している。

以上を総合的に評価し、本委員会は全員一致して横山実紀氏に博士(人間科学)の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。